

方の医師会の概況を述べ、この地方で名を残した十七名の医師の医家伝が綴られている。

第四章以下も同様の体裁で、大正、昭和から現在に至る医師会の歩み、医師会員の動静、想い出が語られている。

一地方の医師会史としては、充実した内容を持ち、特に巻頭から第三章に至る部分は、医史学的にも大変価値あるものと言えよう。

戦後、昭和二十二年、当時諫早にあつた長崎医大に入學し、医学の道を志した私にとっては、私の体験と重複するところもあり、また懐かしい先輩諸先生の名前を見いだし、感慨入深いものがあつた。編集の労をとられた級友草野源一郎先生に敬意を表するものである。

(山之内外一)

〔諫早医師会発行、諫早市泉町二三一五、電話〇九五七一二一
一〇四〇、一九九一年初版、一九九二年再版、A3判、四〇九
頁、頒価五〇〇〇円〕

小曾戸洋・眞柳誠編・解説『和刻漢籍医書集成』

医史学研究者にとって研究領域の史料・典籍の収集は欠かせない。しかし、調査したい史料・典籍をまとめて所蔵している図書館の数が限られているので、先人研究者は、それぞれの研究テーマに応じて和漢洋の原典・第一次史料を手元に収集しておきたいとする収集家でもあつた。

ところが、原典の収集は、昨今の住宅事情から保管スペースの確保に困難性を増して来ているばかりでなく、市場に流通する古典籍の払底によつて価額の高騰が急速に高まって、個人的収集の困難性に一層の拍車を加えている。

一方、コピー機の発達は、刊本・写本を問わず、コピー版を座右に置くことを可能し、比較的需要の高いものでは、復刻版の刊行が相次ぐようになってきている。しかし、復刻版の中には底本の撰定に問題を残すものがあるのも事実である。だから、基本典籍の書誌的研究を疎かにすることは許されない。

慶長以前の和刻古版については、従来から書誌的研究が熱心に行われていたのに対し、近世以降のものについては、ややもすれば書誌が軽視され、一種類の刊本の入手で安心してしまつて、重版・異本の比較をする努力に欠けていたくらいがなきにしもあらずの現状であつた。とくに、古い著者の没後刊行のものでは、版本のみに頼ることが危険なことは、しばしば経験するところであろう。それに対し、漢籍の基本書は先人研究者の伝統的姿勢とそれを後継する人達の努力によつて、地道ながら、大きな成果が挙げられてきている。

今回完結した、小曾戸洋・眞柳誠両氏の編集・解説になる『和刻漢籍医書集成』は、右のような地道な書誌的研究成果をふまえて撰定された、稀覯書を含む善本を底本としている良質な影印・復刻版である。

収載の典籍は、著名なわが国医書刊行の嚆矢とされる『医

書大全』はもとより、江戸期の臨床医家が数多く利用読破してきた宋・金元・明代にわたる基本書の和刻本を揃えた全七〇種、四六七余巻を集大成し、B5判各頁見開き四丁分を二段に縮少影印した利用価値の高い復刻版で、この膨大な基本典籍がスペースを余り取ることなく座右に置くことは大きな朗報である。当該領域を専門に研究する者にとつてはもとより、和書を援用される漢籍の原文を確認したくとも、手元のない漢籍を参照するのに億劫がる向きにとつても、手軽に検索できる便利さがあり、研究のスピードが挙がることこの上ない集成本である。

しかも、書誌研究には定評ある両編者の解説が懇切丁寧になされておられ、刊本状況を和漢両面にわたって克明に追跡し、原著者・和刻本者の伝記にまで及んでいる点で、現時点での情報がほとんど折り込まれているといつても過言ではない。この集成のような良質の復刻本が他の医史領域に及んで、研究者が座右で安心して繙けるような影印・復刻版が相次いで出現することを期待したい。安直な復刻版がまかり通る今日、一服の清涼剤といえる稀れに見る良質の影印・復刻版である。大方の活用を期待すると同時に、両編者の労を多しむたい。

(宗田 一)

〔エンタプライズ社、東京都文京区本駒込二一―三イカハタビル5F、〇三―三九四二―八〇九六、一九九二年、B5判 全十六輯、セット定価二八〇、〇〇〇円〕

北小路博央著

『開業医ブルース 医家二十一代のつぶやき』

北小路家二十一代当主であり、本会々員である北小路博央氏が表題の一書を刊行した。外科医としての勤務医生活を終え、昭和四十四年に京都市内で外科医院を開業して以来すでに二十数年。この四十年間に体験した数々哀歓苦楽の思い出を軽妙なタッチで記述した半生記である。

内容を目次により紹介する。

I、開業はいばらの道か

一 開業医ブルース

二 保険医協会マーチ

三 医学史バラード

II、ふりむけば花の勤務医時代

一 花の厚生技官

二 花の医局長

三 花の病院長

ここで本会々員として特に注目していただきたいのは、医学史バラードの項である。

既に多くの方々も御存知のとおり、著者はわが国最初の女科医と称される安芸守定を家祖とする安芸家(四代守宣―一四七七没―の頃より北小路と改姓)の二十一代当主である。

安芸(北小路)家の歴史については、江戸時代の『雍州府誌』・